

朝鮮戦争における米軍の細菌戦被害の実態

—現地調査報告

中嶋 啓明

キーワード：朝鮮戦争、米軍の細菌戦、被害実態調査、国際冷戦史プロジェクト、ティボニー・ミレイ

自衛隊が戦後初めて、海外の戦地であるイラクに派兵されたという事態の中で、この報告を書かざるを得ないことを残念に思う。

昨年イラクに対する米英を中心とした侵略戦争は、旧フセイン政権が大量破壊兵器を開発、保持しているとの疑惑を最大の「大義」に掲げて行われた。それに日本の小泉政権も同調して、この侵略戦争を支持した。だが、この「大義」には全く何の根拠もなかったことがこの間、ほぼ明確になりつつあるようだ。

何の証拠もない疑惑をでっち上げた米国はその一方で、核、生物、化学の各大量破壊兵器のすべてを実戦で使用したと、現代史の中に記録されている世界で唯一の国家である。米国は第二次大戦後、初めて大規模に生物兵器を朝鮮半島で使用したとされる。約半世紀前の朝鮮戦争でのことだ。朝鮮戦争での米軍の細菌戦については本学の研究でも、例えば2001年2月に発行されたアジア研究所の紀要『東アジア研究』31号で、韓桂玉氏が言及している⁽¹⁾。

ここでは、この朝鮮戦争下の細菌戦について私がこの間、朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）と中国東北部を訪問し、被害者、目撃者ら関係者から聞き取りをした内容などを中心に報告し、今後のこの問題に関する研究の進展に資することができればと思う。なお私の訪朝取材は、静岡大学非常勤講師、森正孝氏を団長とする「朝鮮戦争米軍細菌戦史実調査団」が行った3度にわたる現地調査に同行して行ったものだ⁽²⁾。

▽繰り返される否定キャンペーン

朝鮮戦争での細菌戦については、それが行わ

れた1952年当時すでに、英国やスウェーデン、旧ソ連、ブラジルなどの医学者らからなる国際科学委員会（ISC）の現地調査などによって、旧日本軍の細菌戦部隊731部隊の「成果」を利用する形で米軍が実行したと結論付けられている⁽³⁾。01年6月23日、ニューヨークで開かれた民衆法廷「コリアン国際戦犯法廷」でも、米国が行った大量の民間人虐殺など数々の戦争犯罪とともに、生物兵器の使用に対し有罪判決が下されている⁽⁴⁾。だが、米国は先のISCの結論に対し、共産圏側の宣伝であると一方的に非難し、その後も一貫して細菌戦の実行を否定し続けて今日に至っている。

最近では98年1月8日、日本の『産経新聞』に、米側の主張を“補強”する文書資料が、旧ソ連の国立公文書館から発見されたとの趣旨の記事が掲載された。その文書資料には、ISCの調査に備え朝鮮は、ソ連、中国と打ち合わせの上、死刑囚の朝鮮人2人をベストなど伝染病に感染させ、偽りの汚染区を作り出したことが記されているというのだ。

この資料についてはその後、米国の研究機関「国際冷戦史プロジェクト（CWIHP）」で歴史家のキャサリン・ウエザースビーが英訳を発表。ウエザースビー、ミルトン・レイテンバーグらが、細菌戦非難は朝・中・ソが共謀して行った反米宣伝であったとの趣旨で論文を相次いで発表している⁽⁵⁾。

また、和田春樹・東大名誉教授は『朝鮮戦争全史』で、『産経』記事やCWIHPでの議論を重要な証拠として挙げるなどした上で、「なお一層の資料収集が必要であるが、このキャンペーンが政治的なものであったとみるのが妥当」と主張し、細菌戦で被害を受けたという朝鮮、中国の主張に否定的な結論を導いている⁽⁶⁾。

このように朝鮮戦争における細菌戦は、特に

日米両国内では、その事実を否定する主張が繰り返されることによって、曖昧な疑惑にとどまっておられ、そればかりかそうした「疑惑」の存在すらほとんど知られていないのが実態だと言っているであろう。

だが、先の『産経』記事はそもそも、産経記者が公文書館で見たという文書を筆記によって書き写してきたものであり、原本のコピーを入手した上で書かれたものではない。未だにその文書の存在が他の研究者によって確認されたわけではない。

このため、『産経』記事とCWIHP上での議論に対しては、カナダ・ヨーク大学のステファン・エンディコット教授らが、原本が未確認であることを指摘したうえで、たとえこの文書が存在し、そこに記載された内容が事実であったとしても、文書は当時のソ連共産党指導部内にあった権力抗争の影響を示唆するものであり、米軍が細菌戦を実行したという事実そのものを否定するものではない、との詳細な反論を発表している⁹⁾。

さて、こうした言論状況の中で訪朝した私たち「史実調査団」の一行としては、これら一連の議論経過を無視するわけにはいかず、朝鮮国内でも当時を知る研究者らに対し見解を聞いてみることにした。

答えてくれたのは、日帝支配下の京城帝国大学（当時）医学部などで学び、48年の共和国創立以前は、北朝鮮臨時人民委員会の保健部衛生防疫局長、創立以後は保健省衛生防疫局長を務め、まさに細菌戦のさなかで防疫活動をトップで指揮したキム・ソングン氏（18年6月12日生）だ。キム氏は一昨年8月に2回、昨年7月の合計3回、私たちの取材に応じてくれた。

現在、医学科学院通報センターに勤めるキム氏は、昨年の我々の質問に対し「当時、私たちは戦争をしていたのだ。細菌戦による被害が広がらないよう、防疫活動で必死だった。米国が謀略を張り巡らし、うそをつくことはあっても、伝染病被害者の死体を作り上げるような、そんな謀略をする暇などは一切なかった」と、怒りで体を震わせながら語った。さらに、和田名誉教授が先の著書の中で、当時、細菌戦非難キャンペーンを主導したのは中国で、朝鮮は反細菌戦闘争に不熱心だったと主張しているのに対し、

朴憲永・朝鮮外相が52年2月22日、国際的に細菌戦を非難する声明を発表するに至った経緯について、自らの行動を詳細に話すことが、最も強力な反論になるとして以下のように証言した。

《52年の1月29日にキム・イルソン主席が私を呼んで、朝鮮半島中部の戦線地帯に行き調査するよう命令した。中国の志願軍部隊から米軍が中部戦線で細菌戦を実施しているとの報告があったためだ。当時、中部戦線はこう着状態で、中国部隊の展開地域だけでなく、朝鮮人民軍がいるところにも細菌弾がばらまかれたとのことだった。

現地到着後、兵士らから状況を聴取したところ、細菌戦が行われた最初の事例として報告されたのは1月18日の事件についてだった。この日未明、米軍機が飛んできて、高空から低空に旋回しながら降下して何かを落としたが、爆音もしなかつたし爆発の光もなかつた。朝になって、周囲を見て回ったが、爆弾は見当たらなかつた。しかし、現地にはハエやノミ、南京虫などの昆虫のほか、ネズミなどの動物、紙切れ、磁器の焼き物の割れた破片が雪の上に無数に散らばっているのが目撃されたとのことだった。

私はグループを2組作り、伊川、平康地方を私が責任を持ち、鉄原、金化辺りを中国の防疫隊長が責任を持って調査した。10日間余りの調査の間、私も2回、夜中に同じような事例に遭遇した。

ある朝早く、伊川の現場で2つに割れた磁器製の爆弾を見つけた。私は光復（解放）直後、伝染病研究所を組織するために、ソ連の占領地区にあった平安北道のウンボン水力発電所の倉庫に試薬をもらい受けに行ったが、その倉庫の中で磁器爆弾を見た。その倉庫は、ソ連の参戦で石井731部隊が施設を破壊して試薬や機器を運び込み、疎開させたところだった。だから伊川での爆弾をみて、石井式磁器爆弾だとすぐ分かった。

昆虫など落下物をみんな採取し、2つの組が伊川で落ち合って本格的な検査をした。採取したものの中には、石井四郎が使っていたというセナカスジネズミ（注：学名等不明）もいた。このネズミについては、京城帝大時代、個別指導を受けた日本人教官から731部隊について

聞いて知っていたが、朝鮮には生息しておらず、それまで見たことはなかった。また、ノミは動物を宿主とするものではなく、人間の皮膚につくノミで、人工的に培養されたものと分かった。ハエの中には、朝鮮では珍しい、耐寒性があり雪の上に落ちてはじめは動けなくても、朝日がさすと飛び回れるよう、寒冷条件に適応させたと考えられる種のものもいた。これらのハエ類からはコレラ菌、腸チフス菌、パラチフス菌が、ネズミのノミからはペスト菌が検出された。

細菌弾を雪の上に投下し、なぜ昆虫を活動困難な雪原に撒いたのか疑問だったが、低温で細菌が長期間、生存する上、冷凍保存された細菌はそれ以上に長く保存されるからだと分かった。しかも雪原に撒けば、雪が溶けた後の大地や水源を広範囲に汚染することもできるからだ。

私たちと中国側は、それぞれ別個に検査したが、結果はお互いにぴったり合った。私が帰って主席に報告したのは2月18日。これを聞いて主席は、米軍が細菌戦を実行しているのがこれで確認されたと言った。主席は、私に現地調査を命令する前、1月13日頃だと思うが、捕虜になった米パイロットの陳述内容をつかんでいた。ところがその内容については、私にはひと言も言わないで命令し、現地調査の結果を待ったわけだ。そして私にペストとコレラについて再度検査をさせ、2月20日の軍事委員会拡大委員会で報告させた。

主席は、石井四郎が前年、南朝鮮に現れたという情報ももっていたようだ⁸⁾。軍事委員会拡大会議では、科学技術、兵器が発達している米軍が、幼稚な細菌戦まで働くだろうかという議論もあったが、このように慎重に検討を加えた上で最終的に、外務省による政府声明を出すことが決まった。》

先の『産経』記事やCWIHPでの議論と軌を一にした否定キャンペーンに、ハンガリーのジャーナリスト、ティボー・ミレイの主張がある。ミレイの主張については、オーストラリア国立大学のギャヴァン・マコーマック教授が、その著書『侵略の舞台裏』で「説得力をもって重要な問題を提起している」⁹⁾として簡単に紹介している（マコーマック教授自身は細菌戦を事実と判断している）。

それによると、当時、特派員として朝鮮に滞在したミレイは、「コレラ菌の被害地を取材する30分前に、ワクチンの接種を受けたただけだったが、コレラ・ワクチンは通常2回受けなければならず、2回目の数日後になって初めて免疫ができるはずだ。別の機会に川の氷の上に米軍機が落としたというハエの群れを見たが、投下されたハエが長時間、死なずに生き残っていたというのはおかしい」などと朝鮮側の主張に疑問を呈している。

ミレイ自身、00年6月21日、CWIHPを組織するウッドロウ・ウイルソン・国際センターと韓国協会が共同で開催したワークショップ「朝鮮戦争における新証拠」で、同趣旨の論文を提出している¹⁰⁾。それによると、ミレイが、川の氷の上でハエの群れを見たというのは、52年2月末、平安南道江東郡元灘面松島里で大同江の支流の北江周辺に昆虫が多数、落とされた事件のことを指している。

この事件については私たちも昨年、現地を訪れ、目撃者らから話を聞いた。ミレイは論文の中で、氷の上にいる「ハエがコレラで汚染されている」とピョンヤンの「中央研究所」から明かされた旨記し、ハエが長時間、細菌を保持するのは不可能だという昆虫学の研究者の言葉を紹介している。これに対し、現地目撃者らは私たちの取材に、落とされていたのはそれまで現地で見たこともない「羽のついたアリのような昆虫」で、昆虫が保有していた病原菌は腸チフスだと後に聞いたと話していた（後に紹介するチェ・ドンギユ氏によると、この昆虫は学名カプニア・スペチェスという種類らしい）。

さらに私たちは、キム・ソンジュン氏とその他2人の朝鮮の研究者にミレイのことを尋ねてみたが、3人とも一様にハンガリー人のジャーナリストなどについては知らない様子で、ワクチン接種の方法をめぐるミレイの疑問については手がかりを得られなかった。さらなる詳細な調査が必要なようだ。

▽米軍細菌戦の全体像

さて、被害の実態の方に話を移そう。

まず細菌戦の全体像をキム・ソンジュン氏は次のように分析している。すなわち、50年の朝

鮮戦争開始前から51年6月、朝鮮軍が積極的な陣地防御線を始めるまでの第1期と、それ以後53年7月の休戦協定までの第2期に分け、第1期は、第二次世界大戦さなかの42年ごろから細菌兵器の開発を始めていた米軍が、細菌戦を本格的に準備するため、謀略的な病原性細菌などの使用と細菌兵器の実効性を検討した段階、第2期は本格的な細菌作戦展開の段階、との見方だ。

そして第1期の特徴的な被害事例として次のような事件を挙げる。

第1、戦争開始直前の50年4月から6月にかけて、朝鮮人民軍部隊と内務機関の炊事場や水源地、貯水池がサルモネラ菌などで汚染され、人民軍兵士ら数百名以上に被害が出た。

第2、50年8月15日、南朝鮮の大邱周辺の洛東江沿岸で畑の瓜とスイカを食べた人民軍兵士ら数百名がコレラに感染してひどい下痢に襲われ、うち40%が死亡。

第3、50年末から51年1月までの間、朝鮮北半部に侵入した米韓両軍が、ピョンヤン、平安南道成川、陽徳郡、江原道の高原等を通過しながら天然痘を流行させ、江原道、黄海道、咸鏡南道の各地方だけで3500名以上が発病し、うち死亡者は10%に上った。

第4、50年12月から51年1月、東海岸主要道路沿いに長津湖周辺まで進出した米韓両軍に再帰熱が、仁川、烏山から進入し開城、黄海道、平安南道、平安北道、慈江道まで進出した米韓軍に発疹チフスが発生。人民軍側の反撃に対し、感染した韓国軍兵士だけを道路沿いの民家に意図的に残して撤退したため、その後数万人が感染し、死亡率は20%に達した。

第5、51年秋から冬にかけて、清川江の北から鴨緑江の南端までと、陽徳、咸興、元山一帯に汚染された日用品や玩具、アメなどのお菓子類、水産物が投下され、被害は数万名に上る。

第6、51年3月、国連軍司令部衛生福利処長ジェームス准将が上陸用舟艇1091号によって元山沖に停泊。数ヶ月間にわたり、人民軍捕虜ら数千名に対し数十種の病原性細菌などを使い人体実験を行う。巨済島捕虜収容所でも51年1月から53年4月まで、捕虜らに人体実験を実行。第4収容所だけでも2000人以上が伝染病にかかって死亡。捕虜交換によって帰還した人民軍側兵士らによると、巨済島収容所での人

体実験には日本の細菌専門家が参加したという。以上のような準備を経て、51年11月から12月、石井四郎らがコレラ、ペストを含む各種の細菌兵器などとともに南朝鮮に入った。

そして第2期に至る。

第2期の第1段階である52年1月から4月まで米軍は、前線、後方の別なく細菌兵器をばら撒いた。米極東軍司令部と国連軍司令部傘下の15個飛行機連隊を動員して北半部の200の市、郡のうち169に対し2-3日間隔でのべ8000回あまりにわたって細菌弾のほか、1トン型大型爆弾、ナバーム弾、焼夷弾、イペリット、ホスゲン等の化学爆弾を投下。散布した昆虫は20余種に上り、ペスト菌、コレラ菌、炭疽菌等に加え、農作物に対し被害を及ぼす昆虫や菌類も。

その後第2段階として52年5月から10月までに、東海岸戦線地帯の高城から西海岸沿岸のペチョンを結ぶ地帯、元山、文川、漢川を結ぶ中部地帯、そして鉄道と主要道路が集中している西海岸地帯と東海岸地帯で完全な細菌汚染地帯を形成。

さらに52年11月から53年3月までの第3段階で、主要橋頭堡を汚染地帯に換えるため、鴨緑江、豆満江のほか、西海岸の大寧江、清川江、大同江や、江原道、黄海道などに無差別に細菌爆弾が投下され、細菌をエアゾールにして噴霧するなどの方法も使われた。

最後は53年4月から7月までの第4段階。この時期行われた捕虜交換で、帰還兵の98%がノミを保有し、ほぼ100%が栄養失調状態、30%が何らかの疾病を抱えていた。開城地区で隔離検疫をする間には爆発的な赤痢の発生が数十回あったが、調査の結果、帰還兵が、マラリア予防薬だと偽って赤痢菌の乾燥粉末を飲まされていたことが分かった。

以上の例などからキム・ソンジュン氏は、細菌戦は、単純な戦術からでたものではなく、朝鮮全人民の抹殺と焦土化を狙った米戦略の一環だったと断言する。

全体像についてもう2人、研究者の話を紹介しよう。

歴史研究所の研究員でピョンヤンの人民大学習堂で歴史学を教えているキム・ドクホ氏(26

年8月30日生)は一昨年、私たちに以下のように語った。

《米軍は、沖縄に基地をおく第19爆撃連隊をはじめ、南朝鮮の爆撃連隊、戦闘爆撃機連隊や海兵隊などの爆撃機、戦闘爆撃機などを動員し細菌弾を投下した。使われたのは、磁器爆弾や細菌散布タンク、砲弾、紙爆弾、円筒形の本箱などを利用した500ポンド爆弾型細菌弾、1000ポンド爆弾型細菌弾、落下傘付細菌弾、ガソリタンク型細菌弾などさまざまで、作戦を隠蔽し、伝染の速度を速めるため、感染経路や潜伏期間がまちまちで感染性、致死率が高い細菌が選択された。

病原菌、ウイルスは、ペスト、コレラ、腸チフス、パラチフス、赤痢、発疹チフス、サルモネラや天然痘、流行性出血熱、植物の炭疽病菌等20余種で、昆虫、動物はハエ5種、蚊3種、ノミ、南京虫、ネズミ等34種以上に上っている》

また、現在、保健省中央衛生防疫所に勤めるチェ・ドンギョ氏(33年9月29日生)は、細菌学、防疫学、昆虫学などについて研究を進め、米軍の細菌戦について資料を収集している。

私たちは昨年、チェ氏に話を聞いた。チェ氏によると、平安南道安州郡で初めてペストが確認された52年2月25日以降、54人の腺ペスト患者が出て、40人が死亡した。チェ氏は、過去500年にわたってペスト発生の例がなかった朝鮮で、同時期、同地域で一斉にペスト患者が出たというのは自然現象としては説明がつかない、と強調する。

チェ氏によると、米軍が本格的に始めた52年以降、細菌攻撃の実行回数は1063回に上るといふ。

チェ氏自身、咸鏡南道北西(青?)郡の郡衛生防疫所に勤めていた52年3月ごろ、細菌爆弾を目撃している。米軍のグラマンが2個の爆弾を落とすという住民からの通報を受け、機動防疫隊の一員として現地に出向いたところ、道端に落ちた細菌弾の周辺で多数の昆虫がうごめいていたという。

チェ氏は、昆虫を採取し、周囲を消毒して隔離するなどの初期活動を行った。カヘ里という村だったが、その後、ヤンガ里、コウサンなど

といった北西郡内のほとんどの村と隣接の新昌郡内の合わせて27の里で合計12種類の昆虫を含んだ細菌弾が落とされていたことが分かったという。昆虫などから腸チフス、パラチフス、赤痢などの病原菌が検出され、さらに防疫対策を強化したという。

▽各地の被害者、目撃者証言

ここからは各地個別の被害者、目撃者の話を中心になる。私たちが話を聞くことができた証言者はやはり、米軍が本格的な細菌戦を実行していた時期、キム・ソングン氏の分類によると、第2期の第1、2段階の被害者、目撃者が多い。

まずはISCの報告書にも言及されている大同郡でのコレラ事件についてだ。

この事件は、52年5月中旬、大同郡古平面車里で米軍機が藁で包んだハマグリを落とし、それを拾って食べた20歳代の夫婦がその日のうちに病気になる、翌日までに夫婦2人ともが死亡したというもの。ハマグリからは後にコレラ菌が検出されている。

一昨年、私たちが会った大同江区域人民病院医師のチェ・ユンヒョクさん(37年11月20日生)は事件当時、14歳の中学2年で夫婦と同じ村に住んでいた。

チェさんは「夫婦の死亡後、中央衛生機動防疫隊が村に来た。夫婦の家は立ち入りできなくなって村は隔離され、私は2日間、学校に行けなかった。夫婦の死体は火葬にし、裏山に5メートルぐらいの深さの穴を掘って埋葬され、感染を防ぐため地域が隔離された。その後、国際調査団が村に来て調査した」と、生々しく当時の様子を語った。

この事件では昨年、もう1人の貴重な証言者に出会った。現在、医学科学院微生物研究所研究員で教授博士号を持つキム・ラクチェ氏(24年10月12日生)だ。キム氏は当時、ISCの調査に協力し、報告書に名前が記載されている。キム氏はこう証言した。

《私は中央防疫隊のコレラ担当部長として52年から各地の細菌検査を担当していた。5月になって、大同郡から貝と、死亡した人の腸など

の検体が届いた。貝は淡水の川で採れるものではなく、東海（日本海）岸で採れるようなものだった。検査の結果、コレラ菌が検出された。そのため、検体を送ってきた地域一帯の井戸水と、近くの水源の水などを徹底的に調査した。しかしそれらの場所からも、死亡した人の家周辺で採取したハエや、村にすむ健康な人の大便からもコレラ菌は検出されなかった。当時、米軍機が低空旋回していたことなど、その他の疫学的な見地から、米軍機が貝を投下して被害が出たものと判断した。その後、朝鮮にやってきた国際科学委員会の調査団の前で、実際に菌検出の試験をやって見せた》

先のチェ・ドンギョ氏の話の中に出てくる安州郡では52年2月25日以来、3月12日までに600人の人口の村で50例のペスト感染が発生し、うち36人が死亡している。昨年、リャン・チェファンさん（38年4月28日生）から話を聞いた。

当時、テリ面発中里に住んでいたリャンさんは13歳だった52年2月、米軍機が落とした細菌弾の周辺でうごめいていたハエやノミの塊に好奇心からちょっと触ってしまった。その数日後、急に高熱がスタート、口から血を吐き、鼻からも出血した。左の脇の下と左側の腿の付け根に腫れ物ができ、10日ほどその症状が続いて後、別の病気を併発するなどして1年以上、病床にいたままになってしまった。働くことができるようになったのは54年になってからだったという。

家族は両親、兄2人の5人だったが、全員が同じように病気にかかり、最もひどかったのがリャンさん本人と父親だった。リャンさんは薬草など民間療法のおかげで何とか持ち直したが、父親は3月17日、亡くなった。

村では以後、障害をもった子どもが多く生まれるようになり、リャンさんの息子も障害児だという。

また前記、ティボー・ミレイが現地を訪れたという松島里の北江ほとりでは、チェ・ギョソク（38年10月29日生）、リ・グァンド（35年1月15日生）、リ・サンボム（33年5月8日生）、リ・ヒョンジョン（36年2月6日生）の4氏から話を聞いた。

4人によると、52年2月末、北江に張った氷の上に羽のついた体長1・5センチぐらいのアリのような昆虫が無数に真っ黒く群れになっているのを見つけた。寒い時期で動きはとても鈍かった。郡の防疫隊員らがやってきて周囲を消毒し、3月5日ごろまで地域は隔離された。その間、人民軍や中国志願軍の軍医らによる調査もあった。そうした調査の結果について、腸チフスのような病気を流行らせようとした米軍の細菌戦だったと後になって聞いた。

このほか、江原道平安郡ポチョン里に住んでいたハン・インファさん64歳＝聞き取りの昨年7月時点＝は、51年2月か3月ごろ、熱病に罹り、本人は治癒したものの、母親や親戚多数を伝染病で失った。

12歳だったハンさんは、米軍の空襲が去った後、防空壕から出て家から400-500メートル離れた道端に、2つに割れた小さなドラム缶のような爆弾が落ちているのを見つけた。その中にいたたくさんの昆虫が雪の上に出てきてあたりを這いずり回っていた。2、3日後から村で熱病が流行りはじめ、患者らは次々と死んでいった。そのうち兄、祖母、ハンさんと順番に病気になり、兄とハンさんは母親の看病によって助かったが、すぐに今度は母親が病気にかかって高熱を出しうわごとを發して2週間後、ついに死亡した。その後曾祖父の家にハンさんらは疎開したが、そこでも5人が死亡したという。

以下は一昨年、話を聞いた証言者らだ。

江原道の高城で、診療所の医者だったキム・ヨンファンさん（28年10月3日生）。

《13歳の男女の双子が病気だと聞いて往診した。51年5月のことだ。2人は発疹チフスで、男の子は再帰熱も併発していた。女の子はうわ言をいい、不整脈があり、目が充血して真っ赤だった。1ヶ月治療した揚げ句、死亡した。男の子の方は治療の末、助かったが、今どうしているかは分からない。

このころ急に、発疹チフスや再帰熱、パラチフス、腸チフス、コレラ、天然痘、流行性出血熱など、いろいろな伝染病が初めて発生した。失

神し、嘔吐、下痢、腕や足の神経がまひし、精神分裂症状も起こした。女性の中には生理がなくなる人もいた。皮膚は黄色くなり、横隔膜がけいれんし、腹膜炎や敗血症、中毒症状を起こし、全身が腫れ上がった。治療するのが難しい症状ばかりで、民間療法では治療法はなかった。後遺症が今も残っている人がいる。夜盲症や失明、ビタミンが不足してかっけになり、全身に腫れが残る。治っても体が自由に動かないなどだ。

冬なのに、雪の上にはいろんな種類の昆虫が群れて落ちていて、ハエは攻撃的で地元のものとは違っていた。ネズミも江原道では見られなかった色のもので、目が大きく形も違っていた。

江原道はもっとも被害の大きいところで、住民の95%が何らかの被害を受けた。実際に体験しなければ、細菌戦の怖さは分からない》

ソウル漢江付近で人民軍の看護婦として細菌戦を体験し、被害を受けたイン・ボクニョさん(32年10月23日生)の証言はこうだ。

《ソウルの野戦病院で、漢江を境に敵と対峙していた51年1月ごろ、こちら側の岸に細菌弾が投下された。1月末から爆発的に患者が増えた。患者らは40度近い高熱を出し、うわ言をしゃべり、脈が速く、呼吸が苦しそうだった。病気は天然痘や再帰熱、発疹チフスで、2月中ごろには、1日平均60人から70人を後送した。そのうち、病院の部隊長や看護婦、私も病気になった。私は食欲がなくなり、熱が出て、意識不明になり、死体室の中で気付き意識が戻った。発疹チフスだった。その後、後遺症で顔が腫れ、脈は120-130にまでなり、今も不整脈がある。免疫不全でちょっと体調管理を怠ると、下痢しやすい体になった。52年には甥と姉を腸チフスで失った》

黄海北(南?)道ソソファ郡上里面で、面保安署長として細菌戦による被害者処理を担当したキム・ホヨンさん(25年5月15日生)はこう語った。

《51年1月中ごろから、腸チフスや発疹チフス、天然痘が急増した。私は患者の治療、食糧

供給、埋葬を組織した。診療所に行くと、骸骨のような患者ばかりで、40度以上の高熱を出し、外に這い出して小川の氷を口に含むなどして身悶えていた。上里面で300人近い患者が死亡した。その後、患者が減少したが、また一部に再帰熱が発生した。

52年3月ごろ、細菌爆弾を見た。上里面ワリヨン里青龍道で、翼のようなものがついた鋼鉄製の物体がゆっくりと落ちていき、落ちるやいなや窓が開いて、中の物が飛び出した、と発見者から報告があった。防疫機関が検査したところ、ハエや蚊、南京虫が見つかった》

一昨年、私たちは朝鮮に入る前に、中国東北部でも現地調査した。遼寧省の省都、丹東市には、中国側の抗米援朝戦争記念館がある。丹東市で目撃者数人にあたっているうちに、I S C 報告書に出てくる李思煥さんが今も健在であることが分かった。李思煥さんを急きょ、訪ねて話を聞いた。

当時、本溪県田師付鎮五街七組に住む寛甸中学の学生だった李さん(33年1月24日生)は以下のように語った。

《52年3月中旬、米軍機が白いものを投下したのを、村人が見つけた。3月21日になって、私が落下物を発見、学校長に報告した。見つけたのは、鳥の羽や生きた昆虫の群れと、白い石膏でできたものの破片、それに金属製の破片などで、寛甸県東門外漏河套の川のほとりにあるとうもろこしの畑の中で発見した。昆虫や羽、破片などは数十メートルの範囲に散らばっていた。寒い時期で、生きた昆虫が多数見つかるのはとても異常だと感じた。その後、急に私は瀋陽に呼ばれたり、北京で米帝国主義を糾弾する展示会に参加したりするなど、忙しくなった。7月末には、国際科学委員会のメンバーを連れて現場を案内した。そのほか、外国の法律家の調査団や中央政府の調査団、ジャーナリストらが相次いでやってきた》

李さんの記憶は正確で、I S C 報告書の英語版を示すと、すぐに当時、発見した落下物や李さん本人の写った写真を見つけ確認してくれた。

▽終わりに

朝鮮戦争で日本はさまざまに国連軍＝米軍に協力、関与した。それはこの細菌戦でも全く例外ではない。石井四郎らが南朝鮮に現れたという情報は、東側では大きく報道され、それを傍受、転電した記事が日本国内でも、目立たない小さいものであるとはいえ新聞に掲載されている（『朝日新聞』51年12月9日付夕刊など）。

朝鮮戦争の休戦協定締結翌年の54年に発足した自衛隊には衛生学校が創られ、731部隊の旧幹部らが要職に就いたが、この衛生学校の外郭団体が発行した雑誌『保安衛生』（現『防衛衛生』）には、米軍との関係を示す記事が豊富に掲載され、朝鮮戦争下での伝染病の流行に関する韓国軍医の論文の邦訳も載っている⁽¹¹⁾。

あるいは当時の日本の医学界、薬学界などが

米軍などとも結びついて、細菌戦遂行のための下請け機関を、それと知ってか知らずかはさておき、果たしていたことを示唆する状況証拠は数多い⁽¹²⁾。

かつての植民地支配、侵略戦争での朝鮮に対する日本の戦争責任は、敗戦によってきちんと清算されないまま、それどころか故意に曖昧にしたまま戦後に引き継がれ、朝鮮戦争で米軍の侵略に荷担することで、より深い闇のベールに覆い隠されて、一層その犯罪性を強めてしまった。朝鮮に対する新たな侵略的姿勢を日本が強めつつある今、朝鮮戦争での細菌戦に対する日本の関与という闇は、特に朝鮮に対する大量破壊兵器疑惑を、根拠も曖昧なまま声高に日本が叫んでいる今こそ、徹底して明らかにされなければならないと思う。

-
- (1) 韓桂玉「駐韓米軍とは何か」『東アジア研究』、第31号、2001年2月、28～30ページ
 - (2) 「史実調査団」を組織した「日本軍による細菌戦の歴史事実を明らかにする会」が発行する『明らかにする会・通信』の17号～19号にも、中嶋のほか、森氏らによる現地調査報告が掲載されている。また、2002年調査については『週刊金曜日』8月23日号、2003年調査については、月刊誌『統一評論』2003年12月号、『飛礫』41号でも中嶋が報告している。
 - (3) *Report of the International Scientific Commission for the Investigation of the Facts Concerning Bacterial Warfare in Korea and China, Peking, 1952*. 本文部分の邦訳には『国連軍の犯罪』（不二出版）がある。
 - (4) 『民族時報』2001年7月1日など。
 - (5) Kathryn Weathersby, *Deceiving the Deceivers: Moscow, Beijing, Pyongyang, and the Allegations of Bacteriological Weapons Use in Korea* on http://wwics.si.edu/index.cfm?fuseaction=library.document&topic_id=1409&id=903 visited on 10 Feb 2004. Milton Leitenberg, *New Russian Evidence on the Korean War Biological Warfare Allegation: Background and Analysis* on http://wwics.si.edu/index.cfm?fuseaction=library.document&topic_id=1409&id=37 visited on 10 Feb 2004.
 - (6) 和田春樹『朝鮮戦争全史』岩波書店、2002年、359～363ページ
 - (7) Stephen Endicott and Edward Hagerman, *Twelve Newly Released Soviet-era Documents and allegations of U.S. germ warfare during the Korean War* on <http://www.yorku.ca/sendicot/12SovietDocuments.htm> visited on 10 Feb 2004. エンディコット教授には、ハイゲーマンとの共著で『*The United States and Biological Warfare—Secrets from the Early Cold War and Korea*』（INDIANA社）がある。
 - (8) 歴代部隊長の石井四郎、北野政次と、731部隊の姉妹部隊で動植物に対する細菌戦を研究、実行した100部隊の部隊長だった若松有次郎らが米軍の顧問として、ペスト菌、コレラ菌などを積み込んだ貨物輸送機で南朝鮮に派遣されたというニュースが1951年12月、ビルマ・ランゲン発のテレプレス電で報じられたという事実などについては、ピーター・ウイリアムズ／デヴィッド・ウォーレス『七三一部隊の生物兵器とアメリカ バイオテロの系譜』（西里扶勇子訳、かもがわ出版）など多数が紹介しているが、未だ確認されていない。
 - (9) ギャヴァン・マコーマック『侵略の舞台裏』シアレヒム社、1996年3月15日、232～233ページ
 - (10) Tibor Meray, *Germ Warfare: Memories and Reflection on* http://www.koreasociety.org/TKSQ/TKSQ%20PDF/TKSQ_1-3/06-Meray-Germ-Warfare_1-3.pdf visited on 10 Feb 2004.
 - (11) 第1幕僚監部衛生課 横田俊一（訳）「韓国軍師團における豫防衛生」『保安衛生』、第1巻第1号、1954年3月、41～42ページなど。
 - (12) 例えば朝鮮戦争の休戦協定締結翌年の1954年3月に発行された衛生動物学会の会報『衛生動物』第IV巻特別号には、「朝鮮産屋内鼠蚤の研究」といった論文が載っているほか、多数の元731部隊員らが論文を寄せ、この前後の『衛生動物』には日本にあった米軍の細菌戦基地に所属する研究者も時折、寄稿している。